

真昼のアドリブ

小説＋エッセイ

河野典生



潮出版社

のアドリブ

小説＋エッセイ

河野典生



潮出版社

河野 典生 (こうの てんせい)

1935年高知生れ。

主要著書に『ペインティング・ナイフの群像』

(新潮社)『街の博物誌』(早川書房)『いつか、

ギラギラする日々』(文藝春秋)『明日こそ鳥は

羽ばたく』(角川書店)



真昼のアドリブ

昭和 50 年 5 月 20 日	印 刷
昭和 50 年 5 月 25 日	発 行

著 者 河 野 典 生

発行者 島 津 矩 久

東京 都 新宿 区 南元 町 14-1
発行所 株式会社 潮 出 版 社

編集直通(357)7006 振替東京61090
営業直通(355)1652 〒 160

印刷 大文堂印刷

製本 牧製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

© T. Kono 1975 Printed in Japan

真昼のアドリブ

小説＋エッセイ／目次

街 角 5

△自作について▽

街の底の小さな広場 26

サテライト・スタジオのむこうの少年 31

冬の日の鳩 33

△レコードについて▽

BOBBY・インド版歌謡曲 58

遠い記憶・ハンガリー舞曲 60

われらのラビット・ブルース 63

△ジャズについて▽

ジャズはモリタートのメロディとともに歩いて来た 74

マイ・フェイヴァリット・シングス(山下洋輔トリオ)

アンダーグラウンド 83

△女性について▽

新井苑子―白い部屋と激しいやさしさ 120

富岡多恵子―晴れた日タエコと遊園地へ行った

安田 南―ミナミと自由は手をたずさえて行く 132 126

加賀まりこ―彼女の官能的な暗い空間 137

砂漠の街 143

△対談▽

筒井康隆VS河野典生

第1ラウンド（ジャズ・インド・青春・喧嘩・ミステリー・SF）

第2ラウンド（酒場・読者・批評家・文体・恋愛・戦後） 195

174

インド帰り怪事件 219

装幀・レイアウト 高田 晨一
P H O T O 大西 公平

街

角

その日はやたらと、いそがしかった。

三疊間いっぱい、坐り机に足を突っこむみたいに敷いている、しめって重い万年床から、土管から抜け出してみたいに起きてくると、ぼくはガタピシ窓をひらく。窓の外のロープに腕をのばして、ぶらさがっているランニング、そしてブリーフを引き千切るように外し、またガタピシと窓を閉じた。

季節は五月、まだ肌寒く、鳥肌立った裸の腕や肩のあたり、ちょっと片手でこすってから、古いなまあたたかいブリーフを脱ぐ。くさむらの中、赤黒いやつが縮んでいるが、なんとなく視線を外して、ブリーフをはき、ランニングをかぶる。どちらも、まだ乾ききってなくて、へそのあたりがやたらに冷える。

古いブリーフをもう一度つかんで、ゴムとへそのあいだに、ぐいと挟むと、ふとんのわきを探って靴下をみつけ、ちょっと臭いをかいでから、そのままはく。

靴下だけは買うことにしよう。

坐り机にむかってふとんをぐつと二つ折りにし、寝押したズボンを引き抜いて、ずれてしまった筋を消すため、タオルをぬらしに洗面所へ行く。廊下の窓から、朝日を受けた雑木林の若い梢を眺め……こんなふうに、こまごま書くと、とても話が進みやしないが、とにかく、そんな日常の、ありふれたことも、その日はなんだか意味があつて、ずいぶん、いろんなことを、いそがしくやったなど、いまでも、まざまざ目に浮ぶのだ。

それから、ぼくは学生証を持ち、ラジオをかかえて、むかし作家が情死したため、やはり特別の流れにみえる用水路沿いの道を駅近くまで歩いて、いつもの質屋ののれんをぐる。

「お、早いね」

ふつうはジロツと上目づかい、老眼鏡越しに顔を眺めて、軽くなすくだけの質屋のおやじが、なんだかタイミンクよく、魚屋かなんぞのように声かけて来たが、あれもきつと、いつもとはちがう、ぼくの、のれんのくぐり方のせいだろう。

「千五百円ねえ。……それじゃ、ちょっとあずかれないねえ。このまえば、たしか千円だったでしょ。それより、高田さん、あんたオーバーと時計が切れかかってるよ。そろそろ利息を入れてもらわないと……」

そんなこと言つて帳簿をめくつているおやじから、結局、千三百円ふんどくつて、ぼくは靴下と、ちよつと考へてからブリーフを買い、大衆食堂の椅子でしめつたブリーフを意識しながら、肉ドーフを食い、いそいそとアパートまで帰る。

部屋に入つてすぐぼくはそいつを脱いで、食い込んだ感じのゴムの痕をしばらくこすり、ふやけた感じの草むらの中のやつも掌にすくいとつて、裏表あらためてから、プンと新品のにおいのするブリーフの、料金ラベルをむしり取つて、すつきりとはきかえる。

準備完了。

いざ出陣。

と、そのあたりで、そういう感じになつてもよさそうだった。しかし、その日のぼくは、まだまだそうはゆかなかつた。

坐り机の上に落ちてゐる硬貨とポケットの中の合計と、大まかな予算とを頭の中で比較検討したあげく、今度は小さな本棚のまばらな本の間から、ずっしり重い、たった二冊の本らしい本、ガリマール書店だったか、どこだったか、フランス語原書ジャン・アヌイ全集、そいつを抜き出さなければならなかつたのだ。

そのとき、ぼくは美香の顔を、その日はじめて、まざまざと思い浮べていたのだった。

奇妙なことだが本当だった。

朝からぼくがやって来たことはすべて、美香と繁華街のあの街角で、出会いの約束をしたためだった。にもかかわらず。

美香に惚れてたことは、まちがいなかった。駅ちかくの裏通り、小さな酒場、情死した例の作家とも、なんらか交渉があつたという、ちょっとしゃれた会話もできるマダムの下で、たつたひとり働いていた娘。やや顔色のわるい顎のとがつた顔、吊りあがつた印象の強い目、よく言えばオードリー・ヘップバーン型の、いま思い起せば、幾分ちんくしゃ顔の猫族型の娘、美香。彼女にぼくは、白状すると、夜も昼も胸苦しいほど、惚れていたことはまちがいなかった。

美香が深夜、店を終えると、いつもマダムの車に同乗して、いずくかへ帰って行くのでなかったとしたら、ぼくは、まちがいなく夜毎彼女につきまとっただろうし、彼女がいやだと言ったとしたら、痴漢になつてもいとわなかった。

じつさい、前日、日曜日には、ぼくはそいつになるところだった。

その日曜の午後、アパートちかくの踏切で、国電通過待ちをしているぼくに、彼女のほうから呼びかけて来たのだ。

「たかーださん」

「ああ」

ぼくは振りむき、同時に強い動悸を感じながら、かすれた声で返事していた。

「この近くなの？」

「そうさ。きみも近くなのか？」

「あたしはちがうの。ちょっとママに頼まれた用事で」

「集金？」

「うん」

「ちょっと寄らない？」

いまから思うと、ずいぶん意気こんでぼくは言った。きつとそのせいで、一瞬、美香は真顔になったが、すぐにキラッと目を光らせて、わずかに白い歯をみせ微笑したのだ。

「いいだろ？」

「うん」

万年床を押し入れに突っこみ、美香に部屋へ入ってもらって、ぼくがしゃべっていたことは、まるで思い出すことができないが、きつと、なんとも気障ないろんな話を虚実とりまぜしていたのだろう。

二、三十分経って美香が腰をあげようとしたときのことだ。妙なかたちでぼくは手をのばし、彼女とキスに成功したが、一瞬美香の舌が触れて、ぼくの頭で爆発が起きた。

「いや、ここじゃいやよ。ここじゃいや」

壁の砂を、背中であらざら落して、美香はスカートの裾を突っぱりながら、ささやくような叱りつけるような、そんな感じに何度も言った。

「どこなら、いいんだ」

美香はじつとぼくの目を見た。

ぼくの顔にあぶら汗が浮び、奇妙な姿勢の自分に気がついて来て、もう何秒か経てば謝罪宣言など口ばしりかねない瞬間だった。美香はちよつと目を伏せると、幾分かわばった口調でこう言った。

「街ならいい」

「街って……」

「渋谷とか、新宿とか。……ホテル、あるでしょ」

「ああ」

「乱暴なのはいやよ」

「うん」

「謝ってよ」

「わるかったよ」

美香はようやく薄く笑った。

それから立ちあがった美香の背に、いっばいついている壁の砂を、念入りに払ってやりながら、ぼくは美香から、明日ひるま、渋谷で会う、そんな約束をとりつけたのだ。ひるまがいい、そう美香が小さな声で言ったときは、ちよつと驚きがあったのだが、お店のママに知られたくない、こういうことは、きつく言われてるから、そう美香が、すつと、ぼくを流し見たとき疑問はすべて氷解した。

さて全二巻の原書大冊、ジャン・アヌイ戯曲全集——こう書くと文字だけでも気障ったらしいが——そいつをバラバラとひらき、数ページのしわになった部分、いくらか裂け目のできた部分、それらを念入りに指で引きのばしてみたりしながら、ぼくは、そんな美香の姿態をなまなましく思い起した。

裂け目のページには美香の踵^{かかと}の痕跡らしい、あぶらっぽい褐色の汚れが、はつきり残されていたのだが、そいつのにおいを嗅いでみたいという誘惑にさからうのに、ぼくはずいぶん苦勞をした。

誰も見てやしないのだから、嗅ごうがなめようが、勝手にやればいいようなものだが、そうは

できない年頃だった。

「ああ、あ」

なんも悩ましい声をあげて、ぼくは立ちあがり、窓越しに晴れ渡った五月の空を、かなり永い時間、眺め続けた。

ロマンティックなシーンのようだが、じつのところは、火のように熱い猛り立ったやつをなだめるため、なんとか心を虚ろにしようと、けんめい、努力を続けていたのだ。

やがて、ぼくは全二巻の大冊をかかえ、ふたたびアパートから外に出た。

質屋と同じ駅ちかくの、古本屋のおやじが、何度か二冊千五百円で、あずかってくれた本だった。

売りっぱなしにするのならば、そんな値段はむりだったが、かならず買ひもどすという紳士協定で、古本屋のおやじは、いつでも気軽に応じてくれた。

女性週刊誌なんかによく出ているへんな言葉、一点豪華主義とかいうやつ、いうならばそんな品物だから、ぼくもかならず買ひもどして来た。

「いやに早いね」

ひらいてもみず帳場の奥へ本をしまい、古本屋のおやじはニヤッと笑う。ま、それも無理もない。買ひもどしてから、十日と経ってはいなかったのだ。

それから、ぼくは国電に乗る。駅の時計は十二時だった。

2

やがて、ぼくは渋谷にいた。

どちらかと言えば新宿族で、渋谷はあまり知らなかったが、一度だけ入った渋谷の店を、ぼく

は美香に教えてあった。

たしか△レオ▽という名の店だったと思う。

ハチ公のある駅前広場から、道玄坂を登らず右の方へ行き、今度は左へ折れた繁華街の外れ、白く塗った窓枠のペンキが、黄ばんでひび割れている、ちょっと霧気のある小さな店だ。シャソソソに擬ってる友人にひっぱられて行き、イブ・モンタンの唄う△街角▽^{ゴング・ストリート}かなにか、わるくないなと思ったりした。

ぼくは、その店の窓から見た、むかい側の露地奥の石段、そのむこうの△旅荘▽なんとかの矢印つき看板、△御休憩（二時間）五百円▽の文字を、いやにはつきりおぼえていたのだ。

美香に会うのは三時だった。

「三時ごろがいい」

「三時って昼間の？」

「うん」

美香はうなずき、もう一度ちらと、ぼくを流し見て言った。「それくらいだったら、七時にお店に出られるでしょ？」

「ああ」

ぼくは、あいまいにうなずいたが、美香の計算は正確だった。

渋谷から店のある駅まで約一時間半、つまりは渋谷駅五時半だ。だとすると三時から二時間半で、前後十五分見ても、たっぷり御休憩の二時間はとれるのだ。

△レオ▽には客はいなかった。

四つだけボックス席のある小さな店で、路上から一目で様子が分る。壁の時計は一時五十分、まだ一時間以上あった。

ぼくは道路の向うを見た。

まるで雲ひとつみえないピーカンの天気で、暑いというほどではないのだが、首筋のあたり、じりじりと灼かれる感じがした。

視界の中、露地だけが陽陰で、その奥の石段は打ち水で濡れている。片側はふつうの家で、もう片側は割烹なんとかと看板のある黒塀だった。

黒塀の外れの電柱に、休憩二時間の看板がみえる。

立っているのは、かなり広い道路で、目の前には車が突っ走ったり、人通りもあったはずだが、ぼくはなぜか天涯孤独みたいな気分だった。

まっびるま女と寝る時間を待っているのに、へんな話にちがいないが、じっさいそうだったから仕方がない。

やがて、ぼくは道路を渡り、向いの露地に入って行った。露地特有のしめったにおいに、なんとなく秘境探険みたいな気分をそそられながら、ぼくは、いやにしんとした露地奥の石段を登り、休憩二時間の矢印を見て右折する。

とたん、ぼくはぎくつと止った。

下の道路からでは分らないが、道の片側、古い家並みが数軒分取りこわされて、一台のブルドーザーがどっかと腰をすえている。そしてその周辺で、半裸の男たちが五、六人、弁当を食っている最中だった。

その男たちから五メートルと離れていない道路の角に、頭に緑色の瓦が乗ったくすんだピンク色のコンクリート塀があり、その塀の切れ目に「旅荘」なんとか、「御休憩（二時間）五百円、御宿泊千二百円から」という、すり硝子の看板がはめこまれている。

背後に通行人の足音がきこえ、ぼくはまた、ぶらぶら歩きはじめた。

弁当を食う男たちから視線を外して、ピンクの塀の角を曲った。また、しっとりした陽陰に入った。突き当りに、今度は紫がかった塀のホテルなんとか、があり、その角の電柱には四軒ほどのホテルや旅館や旅荘やの看板がとりついていた。

ぼくは、なるべく普通の足取りで、その一角を歩きまわったが、入って来た露地とちがって、新しい塀や建物のせいとか、あつからんと明るくて、そのくせ人影がまるで少ないので、どこかで誰かに見張られてるみたいな、妙に不安な気分だった。

そんな旅荘やホテルの塀は、たいてい、ふたつか三つ、横道とか露地の側に、ぽかっと切れ目がつき、そこから横道にすつと現われ、すれちがって行く人びともある。そして彼らはなんというか、むっとする存在感というか、人間くささというか、街中でちゃらちゃらすれちがう人びとはまるでちがう、奇妙な感じを与えるのだった。

じっさいは、そんなに広い区劃じゃないが、横道から横道へ曲りくねり、いつか元の道へ出たらしいせいで、ずいぶんぼくは歩き続けた。やがて煙草を一本と立ちどまったとき、目の前の切れ目から、いやにてかてかとした顔の男が姿を現わし、ジロツとぼくを一瞥すると、肩をゆすつてすれちがって行った。煙草に火をつけて、顔をあげたとき、同じ切れ目の植込みの陰に、人影らしいものがじっとしていて、ぼくはあわてて足をはやめた。

しばらく歩いて振り返ると、肩をゆすつて歩く男の姿はもうみえなくて、学生みたいな白ブラウスに黒いタイト・スカートの小柄な女が、スタイルに似合わない途方にくれたみたいな足取りで、とぼとぼ歩いて行くところだった。

3

ずいぶん歩いたな。